

# 老人の居場所と生きがいについての一研究

## A Study of Ibasho and Ikigai of the Senior

伊 勢 真理絵\*

Marie ISE

中 野 靖 彦

Yasuhiko NAKANO

### 1. 居場所という言葉

居場所という言葉が注目されるきっかけとなったのは1980年代頃である。当時、不登校問題が深刻化し、学校が子どもたちにとっての居場所として機能を失いつつあった。そのような子どもたちの学校外の居場所として、東京シューレといったフリースクールやフリースペースが作られた（萩原 2001、住田・南 2003）。

居場所という言葉は広辞苑（第6版）によると「いるところ、いどころ」であり主に物理的な意味で用いられている。また、居場所の定義について宮下・石川（2005）は物理的空間と他者との関係性から「自己の存在感を実感でき、精神的に安心していることができ、ありのままの自分を受け入れてくれ、かけがえのない自分の価値を大事にしてくれる場所」としている。

住田ら（2002）は子どもの居場所について「①安心感を感じるとき②自分が受容されていると感じるとき③価値観を共有していると感じるとき④自分の役割があると感じるとき」とまとめている。

高塚（2001）は空間と時間が交錯する物理的居場所よりも、心理的な居場所を見つけることの難しさを指摘している。

現在において居場所という言葉は本来の意味よりも、安心感や居心地の良さといった心の拠り所となる心理的な意味を含蓄した心の居場所としての用い方がなされている。

高齢社会白書（2014）によると現在の65歳以上の老人は過去最高の3,190万人であり、今後も増加することが見込まれている。

老人が増えることによって、長寿化という喜ぶべき一面はあるものの、反対に老人を疎ましく邪魔者扱いされることも想定され、老人の居場所がなくなってしまう恐れがある。

---

\* 研究生

阿部（1995）は「生きがい論が活発になることは、老人の居場所のなさが切迫した問題である」と指摘している。

心の居場所についての議論は子ども、若者に限ったことではなく、老人についても考えていかなければならない問題である。

## 2. 老年期の特徴

老人とは65歳以上を指し（児島・内山 2008）、年をとるにつれて加齢による老化が起こってくる。老化について近藤（2001）は「加齢によって起こる必然的の老化現象、すなわち身体的、精神的機能が低下し環境への適応力が低下していくことである」としている。

老化が進むにつれて様々な喪失に直面し、長谷川・賀集（1975）は4つの喪失で表しており、「①身体と精神の健康②経済的自立③家族や社会とのつながり④生きる目的」の4つが複合して起こってくるとしている。

井上・長嶋（1980）は4つの喪失に加え、第5の喪失として、自己存在の意味の喪失を挙げ、4つの喪失の根幹を成していることを指摘している。自己存在の意味は生きがいと結びついていると述べており、生きがいを感じる事が老年期の精神的安定を司るといえる。

エリクソン（1977、1980）は、老年期の発達段階が第8段階に該当し、この時期は統合と絶望にあたり、「統合によって自分にとって唯一回きりの人生周期を受け入れ、統合が欠如すると死を受け入れることができなくなる」としている。

エリクソン（2001）はさらに第9段階の存在を付け加え、80、90代に起こる喪失に対して確固とした足場として基本的信頼感の存在を提示し、「老人が第9段階の人生経験に含まれる失調要素を甘受することができるのなら、老人的超越性に向かう未知への前進に成功する」と人生への絶望を受け入れることが、新たな人生への始まりであることを暗示している。

老年期に起こる喪失体験は誰もが避けられない問題である。喪失体験から今までの人生を振り返り、今後の人生について熟考しなければならない。そして残りの人生をどう生きるかが問われる年齢でもある。

さらに、老年期には認知症を発症する恐れもある。小澤（2005）は認知症の定義について「獲得した知的機能が後天的な脳の器質性障害によって持続的に低下し、日常生活や社会生活が営まなくなっている状態で、それが意識障害のないときにみられる」と認知症の中核をまとめている。

認知症は大きく分けてアルツハイマー型認知症、脳血管性認知症、レビー小体型認知症の3つがあり、認知症は年齢が上がるにつれて発症する可能性が高くなり、85歳以上で4人に1人は認知症になる可能性がある（近藤 2010）。

井上・長嶋（1980）は生きがいと老年期の中心課題であることを示唆しており、老年期に起こりうる喪失体験を補填できるものは生きがいであり、生きがいを持つことが老人の心を支えるといえる。

### 3. 生きがいについて

生きがいに関する定義も居場所同様、明確になされていない。島崎（1974）は生きがいとは居がいと行きがいであるとし、前者は仲間と一緒に生きること、後者は自分が進んでいくことである。

谷口・佐藤（2007）は生きがいについて「対象（趣味、学習等）、プロセス（達成感、有用感等）、感情（行為の過程、没頭していること等）、自己実現（趣味、学習等の行為とプロセス）、対人関係（家族との生活、子どもの成長等）」の5つに分けて説明している。

原・中嶋（2012）は「①人に生きる価値や意味をもたらすもので、②個人によって違う主観的、内面的な幸福感で、③主体的な努力により得られる充実感」と表現している。

神谷（2004）は生きがいの特徴として「①生きがい感を与える②生きがいを実利実益と結びつかない③自発性④個性的⑤心にひとつの価値体系をつくる性質⑥独自の内的世界をつくる」と生きがいとは人によって感じ方や考え方が違うことを示唆している。

また、神谷（2004）や近藤（2010）は生きがいと生きがい感を区別しており、生きがいとは生きがいの源泉、対象となるもの、生きがい感とは生きがいを感じる精神としている。ほとんどの場合、生きがいの対象が生きがい感に影響を与えることを近藤（2010）は指摘している。

生きがいとは何かについて考えた際、生きがいは個人によって様々な考え方があり、それを明白に捉えることは難しい。近藤（2010）が指摘するように、生きがいを与えてくれる対象がいることで、自己の存在意義を感じることができ、生きがいを感じるようになる。生きがいを感じる経験が喪失体験を超越し、新たな人生への意味を付与してくれる。老年期には生きがいを感じることでできる体験をしていくこと、見つけていくことを積極的にしていかなければならない。生きがいを持つためには、置かれている環境で主体的に見つけていく力が必要であると考えられる。

老年期や青年期は生きがいを見失いやすいことが指摘されており（高塚 2001, 井上・長嶋 1980）、高塚（2001）は「青年期は将来性、生活基盤が安定している反面、自己の存在感や将来への希望が見えにくい。老年期は時間の制約、心身の低下で自分の意思で居場所を確保しにくくなる」と両者の立場を挙げている。

近藤（2010）は青年期と老年期の生きがいに違いがあることを示唆しており、両者の立場によって生きがいの捉え方が違ってくると想定される。

青年期は生きがいというより、熱中できるもの、目標といった必然的に希望や将来性を指していると考えられ、居場所も自由に選択でき可動性に富んでいる。老年期は喪失体験から脱するため、より人生への意味が問われてくる。老年期は将来への希望や人生のやり直しの制約、心身の低下により、否応なく人生を諦観しなければならない。それに伴い、心理的に受け入れるための心の持ちようが重要となるため、それを補填するものが生きがいとなる。居場所という言葉が用いられる際、学童期や青年期が中心であり、老年期では居場所よりも、生きがいという言葉が引き合いに出されやすいのも、立場の違いからくるものだと推測する。

老年期に生きがいが必要と叫ばれる大きな理由は、喪失体験を乗り越えるためである。喪失体

験から自己と向き合い、新たな人生を生きる意味を見つけること、つまり生きがいを見つけることが必要になる。喪失体験を乗り越えなければ、新たな自己の存在価値を創造することはできない。しかし、認知症を発症した老人に、生きがいを自発的に見つけさせようとするには認知症の進行によって無理が生じる。個人相応の生きがいを周りが支援することも、老人の生きがいを見つけるためには必要である。

#### 4. 老年期の居場所

暮らしの家について考えた際、黒川（2013）は「家にはHouseとしての機能とHomeとしての機能がある。Houseとしての家は、物理的な箱、建築物、間取り、材質、構造、デザインといった要素が含まれる。Homeとしての家は、心理的環境、親しい人とのつながりや関係性を重視する」としている。

住居としての役割を果たす家でも大きく2つの意味を持っており、Houseとしての機能は老人の身体問題から、いかに住みやすい環境をつくりあげるかが問われており、これは住環境の整備といえる。Homeの機能は心の安定を求めており、家族との関係性や本人の主観が左右されるため、Homeの機能には個人差があるといえる。HouseとHomeは言い換えれば、物理的居場所と心理的居場所と言い表すことができる。

老人が過ごせる居場所について、上條（2007）は地域の高齢者の居場所を3段階に分類し、「第1段階は定年退職を迎える60代前半の居場所、第2段階は健康、体力の衰えが進む60代後半から80代前半の居場所、第3段階は認知症、心身の衰えの進行で、地域活動への参加が困難となった人の居場所」と心身の衰えと年齢から高齢者の居場所について捉えている。

大崎・黒見（2012）は高齢者の居場所（居間・食堂）と寝室のタイプを4つに分類した結果、居場所（居間・食堂）と寝室が隣接しているタイプが多かった。また、高齢者自身で住まいを選択することが困難になっていく恐れもあると考察している。

老人が過ごせる場所はどんどん狭められ、自力で選択できる場面が小さくなっていく。これは、社会的な居場所が小さくなっていることを表しており、長谷川・賀集（1975）の指摘する社会とのつながりから離脱していることと一致している。

また、阿部（1995）は「昔にはあった長老の座や隠居の座がなくなり、現在ではシルバーシートという形骸化した居場所が登場した」ことを指摘し、社会的に老人の居場所が縮小していることを裏付けている。

萩原（2001）は身体が居場所の起点であり、伸縮することから居場所の意味と喪失をまとめており、喪失について「①居場所は他者・事柄・物からの一方的規定によって喪失②世界の中での『自分』というポジション、人生の方向性、存在感の同時喪失を意味している③自明な世界の喪失であり、より安全な居場所への引きこもりをうながす」と述べている。

居場所が形成される要因は、自然の脅威から守ってくれ、ある程度の生活を可能にする環境で

あることは勿論、心理的な安定を供給してくれる場所でもある。物理的居場所、心理的居場所の両者が充足していることで、そこに居場所があると感じるようになる。居場所がないと感じる状況は、心理的に何かが満たされていない状態が続く場合に起こる。その空間に身を置いているだけでは物理的居場所としての機能はあっても、精神的に窮屈さを感じていれば、心理的居場所としての機能は発揮されていない。

選択できる居場所は年を重ねる度に制限され、自力で居場所を見つけることが難しい場合、第三者の支援に頼らなければならない事態が想定される。物理的居場所を確保することは勿論だが、心理的に安住できる支援がより求められる。生きがいの対象が生きがい感に影響を与えることは既に述べたが、支援を要する人には第三者の関与によって居場所を提供してもらい、その場所で生きがいを見つけられるように支援しなければならないと考える。上條（2007）が指摘する第三段階に該当する物理的居場所が制限された老人には、心理的居場所が非常に重要な意味を持つ。

田原ら（2013）はインタビュー調査によって、施設入所した後期高齢者が環境の変化に適応する要因としてKJ法で11個抽出し、「自分の居場所が決められる」「家族が支えになっている」「職員のケアが適切である」が挙げられている。

高塚（2001）は「生きがいが見えなくなるということは、自分の『居』場所が見えなくなること他にない。そうなった時に、人の意識面に浮かびあがってくるのは『死』後の世界への憧憬である」と述べている。

居場所を選択する場面が縮小していることを考えると、いかにして与えられた場所で自分の居場所を見つけるかが問われてくる。ここが居場所だと感じるためには本人の自主性も必要となるが、そこで働く介護職に携わる人々の支援が居場所を規定する側面の含んでいると考える。

## 5. 本研究の目的

本研究では上條（2007）の第三段階の居場所に該当する人々に焦点をあて、老人の居場所と生きがいの様相を捉えることを目的とした。

調査方法は、半構造化インタビューでデイサービス外の場所で行った。調査にあたり口頭と文章によって本研究の内容に同意してもらい実施した。対象者は小規模のデイサービスで働いて3年目の女性職員である。インタビュー時間は約1時間15分で、録音の了解がとれなかったため、筆者が対象者の会話の内容を書き取り、文章化した。

質問内容は①デイサービスに来る年齢や介護度②活動内容③老人の接し方、留意点、対人関係④デイサービスに行きたいと思わせる工夫⑤興味を持たせる工夫⑥趣味⑦デイサービスに行く目的であった。質問内容①～⑦の概要を表1に示した。

表1 質問内容の概要について

質問内容	
①デイサービスに来る年齢や介護度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用者の年齢</li> <li>・利用者の介護度</li> <li>・利用者の人数</li> </ul>
②活動内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一日の流れについて</li> <li>・運動の種類、自由時間の使い方</li> <li>・職員の動き</li> </ul>
③老人の接し方、留意点、対人関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用者との接し方について</li> <li>・気を付けていること</li> <li>・具体的な利用者の事例</li> <li>・職員同士の関係</li> <li>・利用者同士の対人関係</li> </ul>
④デイサービスに行きたいと思わせる工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>・デイサービスに行きたいと思わせる工夫</li> <li>・利用者のデイサービスに対する意識</li> <li>・利用者と家族の関係、同居の有無</li> <li>・デイサービスの相性について</li> </ul>
⑤興味を持たせる工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>・レクリエーションに興味を持たせる工夫</li> <li>・職員の関わり方</li> <li>・レクリエーションの種類</li> </ul>
⑥趣味	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用者の男女比、職業</li> <li>・利用者の趣味の有無</li> <li>・趣味に関する具体的な事例</li> </ul>
⑦デイサービスに行く目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・デイサービスに行く目的、理由</li> <li>・利用者の家族と職員の関わり</li> <li>・施設と職員の関係</li> </ul>

## 6. 結果及び考察

### 6-1 居場所について

表2 デイサービスでの居場所について

	内容
職員からみた利用者との関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・苗字に「～さん」と付けて呼んでいる</li> <li>・心地よい関係をつくるため適切な距離を保っている</li> <li>・利用者との距離が近い</li> <li>・小規模なので利用者の仕草や性格を理解しやすい</li> <li>・認知があっても嫌なことは嫌とわかる</li> </ul>
利用者の家族関係について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・同居9割、独居1割</li> <li>・家族関係は様々で、送迎の時によくわかる</li> <li>・家族関係が良好な利用者はデイサービス内でもよく喋る</li> <li>・家族が大変だからデイサービスに行かせているという節もある</li> </ul>
利用者からみたデイサービス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人によってこのデイサービスに向き不向きがある</li> <li>・利用者目線でその人にあったデイサービスを見つけることが大切</li> <li>・「何でこんなところに行くのかわからない」という体験者は次回から来ない</li> <li>・利用者の中に「行きたくない」という人はいない</li> <li>・最初は行きたくないと言っていた利用者も、回数を重ねることでデイサービスに行くようになり、認知も緩和される</li> <li>・最初からデイサービスに自主的に行きたいと思わない</li> <li>・社会参加のためにデイサービスに行く</li> <li>・ここに来るとみんなとしゃべれる</li> <li>・家にいてもしゃべり相手がいらない</li> </ul>
活動内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用者の介護度や年齢は様々</li> <li>・利用者の人数は日によって違う</li> <li>・職員は利用者をサポートしながらレクリエーションに参加している</li> </ul>
他の人間関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用者同士はケンカすることなく良好</li> <li>・職員同士の関係も良好</li> <li>・デイサービスに行かせるには、ケアマネージャーが家族に様々な施設を紹介してくれる</li> <li>・ケアマネージャーと施設の関係も大事な部分</li> </ul>

インタビューから得られた内容について質問内容①～⑦を文章化し、居場所と生きがいに該当する文章を箇条書きにし、表2、3に示した。居場所と生きがいに共通していえる文章は両者に記載した。

インタビューの内容を基に考察を行うため老人という言葉を使用せず、利用者という言葉を用いて論を進める。

居場所について大別すると、「職員からみた利用者との関係」「利用者の家族関係について」「利用者からみたデイサービス」「活動内容」「他の人間関係」であった。



デイサービス以外の家族やケアマネジャーといった関係も利用者の居場所に影響を与えていることが明らかとなった。

利用者がデイサービスに行くことについて、「利用者の家族関係について」「利用者からみたデイサービス」「他の人間関係」から利用者は自主的にデイサービスに行きたいと申し出ることはほとんどなく、家族がケアマネジャーを通してデイサービスに行くという形となっており、この点から物理的居場所は家族やケアマネジャーが裁量していると言える。

最初から望んでデイサービスに行くわけではないため、「何で行かなきゃいけないの?」と抵抗を感じる人も少なくない。また、デイサービスに実際行くことで、この場所が自分にとって相応であるかを確認していると考えられるが、いざ通うことになると「行きたくない」という利用者があることも実情である。

知り合いや頼れる人がいない、自分を守ってくれる人がいない孤立感、不安感があるため、デイサービスに行くことを自然と遠ざけてしまうのが理由の一つであろう。デイサービスに行くことはインタビュー対象者のいう社会参加であり、ひきこもり防止や家族の介護負担の軽減でもある。デイサービスに行くことは社会とのつながりを持ち、孤独感を軽減してくれ、喪失体験を乗り越えるきっかけにもなる。また、介護認定を受けた人しかデイサービスに通うことはできないため、まず、利用者自身がデイサービスに行くことを受け入れていく必要がある。そして、デイサービスが利用者にとって居心地がいい場所であるかを、周囲が利用者の気持ちを尊重することも重要である。

デイサービスに居場所をつくりやすい利用者は、家族関係も良好であることが考えられる。「利用者の家族関係について」の「家族関係が良好な利用者はデイサービス内でもよく喋る」という点から、家の中に自分の居場所がある安心感から、デイサービスでも受容されている意識を持ちやすく、自分の居場所を見つけることが容易であるといえるだろう。

デイサービスの活動について「活動内容」から、デイサービスに来る利用者の介護度や年齢にはばらつきがあり、日によって来る人数も違うことがいえる。具体的にインタビュー内容ではデイサービスの活動は次のように述べられている。

一日の流れは送迎から始まり、バイタルチェック、入浴、ごはん、レクリエーション、おやつ、送迎となっています。

デイサービスに着いたらまずバイタルチェックをやり、手洗いうがいを行っています。うがいは緑茶で行っていて、誤って飲み込んでも大丈夫なようにそれを用いています。それが終わると、時間によって交互に男女別に入浴が始まります。入浴を待っている利用者さんたちには、機能訓練や学習プリントや軽い運動や嚥下体操を行い、なるべく様々な箇所を動かすようにしています。男女ともに入浴が終わると、ご飯を食べ、その後は1時間ぐらいうっくりする時間があり、その時間に横になって寝る利用者さんもいらっしゃいます。その後、体操を上肢下肢約30分行い、レクリエーションを30分し、おやつの時間を経て、送迎を行うという流れで一日が終わります。

一日の流れをみると、デイサービスの活動は毎回同じ時間帯に同じ活動を行っており、数回しか利用しない利用者にも安心感を与えてくれる。毎回来るたびに同じような時間の流れで活動し



ていなければ、利用者の混乱を招く恐れもあり、基本的な活動を定刻どおり行うことが重要であると考ええる。

利用者と職員の関係について「職員からみた利用者との関係」「活動内容」では、利用者のことを第一に考え各々の性格を理解しながら、一定の距離を保っている。レクリエーションでは利用者と混ざってレクリエーションに参加しており、参加しながら利用者のサポートも同時に行いながら利用者を孤立させないように努めている。居場所となる要因には、職員がどれだけ利用者を理解し、適切な距離間で人間関係を築き、心地よい空間をつくっていくかが問われるといえよう。

長谷川・賀集（1975）は「老人ホームはほとんどの人にとって終生の場となり、ホームが居心地の良いところとなるか否かは職員の双肩にかかっている」と指摘している。これは老人ホームに限らず、デイサービスについても言えることである。

黒川（2013）の言うように、Homeとしての親しい人とのつながりや関係性に重きを置くという指摘はデイサービス内の活動においても重要な考えであり、居場所となる要因には物理的居場所と心理的居場所の双方が充足していなければならないが、心理的居場所が居場所を規定する大半を占めるといっても言いすぎではない。

心理的居場所は誰かに受け入れられている感覚がなければ成立しないため、デイサービスの活動から皆と同じことをやり、同じものに参加し、楽しむということは孤立感を生みにくく、所属感を生みやすいといえる。

こういった体験の積み重ねが利用者の安心を生み、心地よいと思わせるのだといえる。この安心感、受容感が認知症を発症した利用者の症状を緩和してくれるのではないかと考える。

## 6-2 生きがいについて

表3 デイサービスでの生きがいについて

	内容
レクリエーションについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・積極的にやりたいという意欲的な利用者はいない</li> <li>・職員の促しで参加している</li> <li>・レクリエーションに興味を持たせる工夫は特に無い</li> <li>・レクリエーションがきっかけでパズルにはまる利用者もいる</li> <li>・レクリエーションはみんなができるものを採用している</li> </ul>
趣味を活かす	<ul style="list-style-type: none"> <li>・女性は6割来ており、身なりを気にする方が多い</li> <li>・男性は女性に比べて身なりを気にしない</li> <li>・現在特にやりたいことがなく、打ち込めるものがないと語っている</li> <li>・昭和20年代の曲をかけて興味をもたせるようにしている</li> <li>・カラオケ好きな人がいて、3,4曲歌って帰っていく</li> </ul>
デイサービス内	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入浴が楽しみである</li> <li>・子どもたちがデイサービスに訪問すると、泣き出す利用者もいる</li> <li>・ここに来るとみんなとしゃべれる</li> </ul>

生きがいとは、「レクリエーションについて」「趣味を活かす」「デイサービス内」に分けることができた。概ね「レクリエーションについて」や「趣味を生かす」での利用者の姿勢は積極的とは言えず、職員の働きかけで参加している様子が伺える。

デイサービス内での生きがいとは何かについてであるが、生きがいとなりうるものにレクリエーションが考えられた。

「レクリエーションについて」の内容から利用者のほとんどがレクリエーションに自主的に参加するより、職員の促しで参加しているため意欲的に取り組む姿勢がみられない。レクリエーションは、機能維持、体を動かすこと、交流が目的なため、生きがいを見つけさせるために行っているわけではないと考えられる。「レクリエーションについて」の「レクリエーションに興味を持たせる工夫は特にない」という内容が得られるのも納得できる。そして、「趣味を活かす」でも利用者は現在、特にやりたいことや打ち込めることがないことが明らかとなった。

レクリエーションの具体的な内容について、インタビュー対象者は次のように語っている。

レクリエーションは風船バレーや輪投げ、魚釣りといったものがあり、他のデイサービスもこういうレクリエーションをやっていると思います。刺繍とか細かいものをやらせようとする、できる人とできない人がいるため、レクリエーションはみんなができるものを採用しているので、幅がないです。そこは利用者さんからしたら短所になるのかもしれませんが。

レクリエーションの内容は比較的誰もが参加しやすく、楽しめるもので構成されていることがわかり、簡単な準備で手軽に取り組めることが重要であるといえる。レクリエーションでの活動は協調性が問われ、細かい作業のようなものは採用されないため、利用者のできる事、やりたい事が全て叶えられるわけではない。

レクリエーションは、内容よりも職員と利用者が混ざって、レクリエーションをする過程に一体感があり、人との関わりの楽しさを思い起こさせてくれる一つのきっかけとなっていると考える。また、「デイサービス内」での「ここに来るとみんなと喋れるから」という言葉から、趣味や、やりたい事が特にない利用者は、ありのままを肯定してくれる職員や利用者との関係がより重要になってくる。そのため、デイサービスでの活動の中で何かが特化して好きなのではなく、デイサービスの活動や携わる人々も含め、デイサービスに行くこと自体が生きがいとなっていると考える。

レクリエーション以外に、カラオケ、パズル、入浴と利用者自身がデイサービス内で自発的に見つけたものは生きがいとなるだろう。例えばカラオケ好きな利用者について得られたインタビューでは次のように述べられている。

利用者さんの中にはカラオケ好きな人がいて、その利用者さんは3、4曲歌ってから帰ってきます。この利用者さんがカラオケ好きだということを知って、職員と相談した結果、歌わせてあげようということになりました。

利用者の以前からの趣味であったカラオケは、職員の機転によって歌うことができるようになり、職員が利用者の気持ちを汲んでいることが伺える。デイサービス内で以前からの趣味を生かすことは可能な範囲で対応できるようだ。

また、「趣味を活かす」で挙げた女性の利用者は身なりを気にするという内容から、黒川(2013)は衣服の持つ意味について7つ示唆しており、その内「他者や社会と出会い、つながる衣服」「新たな世界への導き手としての衣服」が合致すると考える。家族が身なりに配慮していることも考えられるが、身なりを気にすることは、外に出ることを楽しみにしていることであり、外に行こうとする前向きな気持ちにさせてくれ、黒川が指摘する新たな世界へ誘う手段の一つであるといえる。そして、利用者や職員に褒めてもらうことでより、デイサービスに通うことが楽しくなり、張り合いが生まれると考える。

デイサービスに行くことは社会参加である。心身の低下や意欲の無さからひきこもりがちになる老人は珍しくない。社会との関わりをもつことは様々な人と接する機会を持ち、社会へ出ることの興味、楽しさを追体験させてくれる。

職員は利用者の安心できる環境を提供すること、快適に過ごせるための配慮で利用者が自発的に生きがいを見つけていく。利用者の介護度に差異があるものの、デイサービスに行くことを楽しみにしているという点では共通しており、居場所がある感覚が生きがいを見つけやすくするのだと考える。

利用者は、デイサービス内にいる誰かに必要とされている、受け入れられている感覚から、偶発的に人との関わりに積極的になり、生きる張り合いが生まれ、デイサービスに行くことに生きがいを感じると考える。居場所がある感覚が喪失体験から脱する契機となり、安心できる居場所に通うことで生きる目的を見つけ、喪失体験を越える利用者らしい新たな生きがい生まれるのである。デイサービス内での生きがいは、人それぞれであり、個性性が認められたといえよう。

生きがいを持つためには他者から受容されている居場所があり、安心感を得ることで自発的に生きがいを見つけることができる。自分を受け入れてもらえる居場所があることで、自分らしく振舞うことができると考える。身体が自由が利く年齢だと様々な場所で新たな世界を知り、生きがいを見つけることができる。一般的に生きがいと言われて連想するものに、趣味、旅行、家族や孫などが想起されるが、これらは自由に行動できる年齢に限られる生きがいであろう。

ある程度身体が自由に制限がかかると、限られた世界でしか活動することができない。限られた範囲で生きがいを持つためには、受容されている安心感が居場所にあるかが問われてくる。デイサービスに通う利用者は、自宅とデイサービスが行動範囲であり、デイサービスに限られた外の世界となるため、生きがいとなる対象がデイサービス内に見出しやすいと考えられる。しかし、老人ホームでしか生活を送ることができない場合の生きがいは、これまでの経験してきたこと、例えば子どもを育てた、仕事で成功した、故人を偲ぶなどが生きる支えになっていることもある。生きがいは利用者の置かれている状況、環境などによって差異が生じてくると考える。

## 7. まとめ

本研究ではデイサービスに通う利用者に焦点をあて、デイサービス内の居場所と生きがいについて介護職員にインタビューを行い、その様相を捉えることを目的とした。

デイサービス内では施設の設備や環境以外にも、周りの人々に受容されていると感じることで、そこに居場所があると実感する。そして、一般的に想起されるような趣味や旅行といった生きがいではなく、利用者それぞれに生きがいをデイサービス内で見つけており、個性性が明らかとなった。認知の有無に関わらず、根底には人と関わりたいという意欲が利用者の生きがいにつながり、喪失体験を乗り越えていく原動力となっているといえる。

## 8. 今後の課題

本研究においてインタビュー対象者が居場所や生きがいに囚われないよう配慮しながら行った。筆者自身、インタビュー調査が初めてだったこともあり、インタビューの最後に居場所や生きがいについて介護職員がどう考えているかを聞くことも必要であったと考える。また、生きがいにも反社会的なもの、例えば憎しみや恨みが生きがいになっていることもあるため、その点についても今後推考していくことも有用である。

今回はデイサービスを対象に取り上げたが、老人ホームの居場所や生きがいはデイサービスと違い、より制限された居場所であり、生きがいについてもデイサービスとは違ってくると思われるため、その点についても比較することが老人の内面を捉えていく上で非常に重要であると考えられる。

## 9. 引用文献・参考文献

- 阿部一美 (1995) 施設における老人の「居場所」 京都大学教育学部紀要 (41)  
Pp173-184
- E.H. エリクソン (1977) 仁科弥生 (訳) 幼児期と社会Ⅰ みすず書房
- E.H. エリクソン (1980) 仁科弥生 (訳) 幼児期と社会Ⅱ みすず書房
- E.H. エリクソン・J.M. エリクソン (2001) 村瀬孝雄・近藤邦夫 (訳) ライフサイクル、その完結〈増補版〉 みすず書房
- 萩原建次郎 (2001) 子ども・若者の居場所の構想 田中治彦 (編) 学陽書房 Pp51-65
- 原千恵子・中島智子 (2012) 心理学の世界専門編2 老年心理学 高齢化社会をどう生きるか 培風館
- 長谷川和夫・賀集竹子 (1975) 老人心理へのアプローチ 医学書院
- 井上勝也・木村周 (1993) 新版老年心理学 朝倉書店
- 井上勝也・長嶋紀一 (1980) 老年心理学 朝倉書店
- 上條秀元 (2007) 高齢者の居場所づくりについての一考察—「ふれあいサロン」の活動に即して— 宮崎大学生涯学習教育センター研究紀要 (12) Pp 1-20
- 神谷美恵子 (2004) 生きがいについて みすず書房

- 児島美都子・内山治夫（2008） よくわかる専門基礎講座 社会福祉 金原出版
- 近藤勉（2001） よくわかる高齢者の心理 ナカニシヤ出版
- 近藤勉（2010） よくわかる高齢者の心理 改訂版 ナカニシヤ出版
- 黒川由紀子（2013） 日本の心理臨床5 高齢者と心理臨床 衣・食・住をめぐって 誠信書房
- 宮下敏恵・石川もよ子（2005） 小学校・中学校における心の居場所に関する研究 上越教育  
大学研究紀要 24（2）Pp783-801
- 内閣府（2014） 平成26年度版 高齢者社会白書（概要版）HP
- 大崎友記子・黒見敏丈（2012） 在宅要支援高齢者の住まい方からみた間取りのあり方ー日常的な居場所と寝室の関係性を着眼点としてー 岐阜女子大学紀要 41 Pp115-124
- 小澤勲（2005） 認知症とは何か 岩波新書
- 島崎敏樹（1974） 生きるとは何か 岩波新書
- 住田正樹・藤井美保・田中理絵・中田周作・横山卓・溝田めぐみ・東野充成（2002）  
子どもたちの「居場所」と対人関係（Ⅱ）ー小学生・中学生の場合ー 日本教育社会  
学会大会発表要旨集録（54）Pp330-335
- 住田正樹・南 博文（2003） 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会
- 田原育恵・堀内美由紀・安田千寿・筒井裕子・太田節子（2013） 介護老人福祉施設入所による生活環境変化に適応するための要因ー後期高齢者のインタビュー調査よりー 聖泉看護学  
研究 2 Pp59-67
- 高塚雄介（2001） 子ども・若者の居場所の構想 田中治彦（編）学陽書房Pp36-50
- 田中元（2007） 図解 よくわかる介護保険しくみ編+実践編 ナツメ社
- 谷口幸一・佐藤眞一（2007） エイジング心理学ー老いについての理解と支援ー 北大路書房